

大野和基インタビュー・編『未完の資本主義』PHP新書（2019年）

本書は資本主義の直面している課題とこれからの将来像について、経済学、歴史学、人類学など7人の世界的知識人に、国際ジャーナリストの大野和基氏がインタビューしたものである。選ばれた方の中にはノーベル賞経済学賞受賞者（ポール・クルーグマン）もいれば、異端の経済学者（トーマス・セドラチェック）、さらに、反グローバリズムを唱える運動家の顔を持つ文化人類学者（デヴィッド・グレーバー）もいる。

目次だけでもきわめて興味深い。「雇用の完新世が終わり人新世がはじまる」、「職業の半分がなくなり、どうでもいい仕事が急増する」、「成長を追い求める経済学が世界を破壊する」、「ベーシックインカムと1日3時間労働が社会を救う」、「データ資本主義が激変させる未来」等々である。

経済の仕組みと雇用、労働を大きく変化させたテクノロジーの進化とともに、階級と貧困の固定化、格差拡大、少子高齢化、移民問題、気候変動など、従来の経済学や政治思想では解決できない様々な問題が噴出、このためポスト資本主義、資本主義の終焉と言われるようになった。本書を選んだのは、こうした資本主義の将来についてどのような論点があるのかを確認してみたかったからである。

期待したとおり、本書の内容に知的興奮を大いに感じた。一方、提起された多くの解決策がどこか牧歌的、夢想だと感じたのも事実である。資本主義に替わる経済システムを提起する人もいなかった。資本主義は「未完」のまま進化し続けるということのようである。

本書で最も注目した論点を提起したのが、現代資本主義における弊害として「どうでもいい仕事」(Bullshit Jobs、BS職)の存在と増大を指摘したデヴィッド・グレーバーだ。彼の言うBS職とは、「その仕事をしている人がいなくなっても不都合が生じない、あるいは世の中が少し良くなるかもしれない、BS職自身が知っている」仕事のことである。具体的にあげた仕事は、受付係や秘書、企業弁護士や電話営業、謝罪のための電話番、社内コンプライアンス部門、中間管理職の5種類の仕事で、「役に立っていない」と考える人が多いという。これと対照的なのがブルーカラーの携わる仕事で、リアルに社会に役立っていると感じられる仕事である。

グレーバーの立論の難点は次の点にあると思われる。①BS職が増大した必然的説明が欠けている。何故、BS職に無駄に高額な報酬が支払われてきたのか。②「役立っているのかわからない」という意識は、実際に「役に立っていない」ということと同義ではない。「役に立っていない」と思うからといって、実際に「役に立っていない」のか。③「役に立っている」と感じる人でも、“自分でなければ”という意識を持てるかどうかは別なのではないか。仕事の価値と自分の価値と同一視できないことが問題なのでは。④中間管理職を例に仕事をしていない人が増えたというが、プレイング・マネージャー化した現代でも当てはまるのか。“サラリーマンは気楽な稼業”は死語と思われるが。⑤「どうでもいい無駄な仕事」により快適な生活やサービスが支えられていることはないのか。⑥“熟練”の測定が困難なように、「役に立っていない」を定量的に測定できるのか。

過剰包装的、儀式的仕事やポストは削減すべきだが、複雑化した社会を円滑に運営するためには、「どうでもいい仕事」にも意味があるように思える。これは仕事の境目があいまいな日本人からそう思うのだろうか。

なお、タイトルの「未完の資本主義」は、シュンペーターの資本主義論を借りて、「批判すらも飲み込み自己変容を遂げていく、いまだ完成をみないシステム」という評価からきている。短いインタビューであったため、食い足りない点、疑問も多く残った。今後、各論者の主著の講読に進みたい。(西村博史)